「桜樹詠文字模様小袖」と18世紀インド生命樹更紗における立木模様

デザイン構成要素の比較を通じて

TREE PATTER IN EDO YUZEN KOSODE AND 18th CENTURY INDIAN CALICO

A Comparative Study of Their Design Elements

佐久間　華　　大学院芸術工学研究科　助手　（文責）
松本　美保子　　名誉教授
杉浦　康平　　名誉教授
齊木　崇人　　大学院芸術工学研究科　教授
ばんば　まさえ　デザイン学部ファッションデザイン学科　準教授

Hana SAKUMA　Graduate School of Arts and Design, Assistant
Mihoko MATSUMOTO　Honorary Professor
Kohei SUGIURA　Honorary Professor
Takahito SAIKI　Graduate School of Arts and Design, Professor
Masae BAMBA　Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Associate Professor

要旨

本報告は、江戸友禅小袖「桜樹詠文字模様小袖」と18世紀インド、コロマンデル地方のヨーロッパ向け生命樹更紗における立木模様の比較分析を通じて（1）両者における立木模様の構成要素（2）両者における立木模様の相関性と各々のデザイン原理を明らかにするものである。本報告書で使用する主な資料としては、現存する「桜樹詠文字模様小袖」、「梅樹扇模様帷子」、および18世紀インドコロマンデル地方でつくられた生命樹更紗（V&A所蔵）27点を使用する。V&A IM.49-1919（写真3）は、中でも幹・花・根の部分にインド生命樹更紗の特徴が顕著にみられることから、インド生命樹更紗の一典型として用いることとする。両者を比較するにあたって立木模様の構成要素を（1）幹ーアジアの生命樹の4つの樹相、(2）インド生命樹の主要素である「百花繚乱」という表現形態、(3）大地の表現形態ー樹と大地のつながり、(4）樹の空間性　に分けた。そして、これら4つの構成要素を用いて両者の相関性を示すと共に独自のデザイン原理を明らかにする。

Summary

By comparing the tree pattern in Edo yuzen kosode `kosode with blooming cherry trees and Chinese characters' with the tree of life pattern in 18th century Indian calico made in Coromandel coast, this report aims to clarify (1) elements that each of the tree patterns is composed of, (2) the similarities and differences between the two, and their own design principles. Research materials used in this report are; Edo yuzen kosode `kosode with blooming cherry trees and Chinese characters'; Edo yuzen katabira ``katabira with fans and Japanese plum trees'; 27 pieces of 18th century Indian calico made in Coromandel coast (V&A collection) including V&A IM.49-1919 which is used as a typical example of tree of life. In order to examine the above two kinds of tree patterns, the following four design elements have been considered (1) the expression of tree stem- four basic forms of Asian tree of life, (2) the expression of many flowers blooming in profusion which is a key element of Indian tree of life, (3) the expression of the notion of the mother earth, (4) the expression of the sense of space around each of the trees.

1 はじめに

春のおとずれを謳った『和漢朗詠集』春に収められている源英明の漢詩「始識春風機上巧　非唯織色織芬芳」（始めて識んぬ春の風の機上に巧なることを　ただ色を織るのみにあらず芬芳をも織る）を主題にした「黄地桜樹に文字模様小袖」（写真１.2）は、見頃全体に桜の大樹を配置した季節感溢れる友禅小袖である。本報告は、江戸時代に作成された「黄地桜樹に文字模様小袖」と 18 世紀インド、コロマンデル地方のヨーロッパ向け生命樹更紗に相関性があると仮定し、比較分析を通じて、(1)両者の立木模様の構成要素、(2) 両者における立木模様の相関性と各々のデザイン原理を明らかにすることを目的とする。

（写真 1.2）黄地桜樹に文字模様小袖　江戸時代中期　女子美術大学美術館所蔵。出典：大森達次編集、『KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界』、展覧会図録、女子美術大学美術館、2006、p.37（写真 1）、p.39（写真 2）

本報告書は、本共同研究の一環として行った芸術工学会 2011 年度秋期大会の口頭発表に基づき、更に文様の分析を深めたものである。本報告書で使用する主な資料としては、現存する「黄地桜樹に文字模様小袖」、「黒地梅樹に扇模様帷子」、および 18 世紀インドコロマンデル地方でつくられた生命樹更紗（V&A 所蔵）27 点を使用する。V&A IM.49-1919（写真 3）は、中でも幹・花・根の部分にインド生命樹更紗の特徴が顕著にみられることから、インド生命樹更紗の一典型として用いることとする。

友禅とインド更紗の歴史的背景

インド更紗は、当時、最高峰と評された捺染技術を駆使して生産され、古くから世界各国から羨望の的であった。日本には、室町時代以降、インドとの貿易が盛んなスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリスの貿易船によってもたらされたといわれる。日本にも日本人好みにつくられたインド更紗と共にヨーロッパ向けインド生命樹更紗も輸入されており、江戸の人々の間で生命樹更紗は馴染みのあるものであった。

インド更紗の輸入は、日本の染色技術の発展にも貢献した。江戸時代中期には、インド更紗を模造するのが流行し、その後、和更紗へと発展を遂げた。また、インド更紗は、友禅の捺染技術との類似点がみられることから友禅の発達にも関与したとも言われている。

このようにインド更紗に魅せられた日本の職人がその染色技法の習得と共にその生命樹模様への造詣をも深め、「黄地桜樹に文字模様小袖」にみられるような立木模様をつくりだしたという可能性は十分にあると本研究では考える。

（写真 3）V&A IM.49-1919, C. 1800, Victoria and Albert Museum, London 所蔵。出典：Rosemary Crill, “Chintz INDIAN TEXTILES FOR THE WEST”, V&A, 2009, p.42

2「黄地桜樹に文字模様小袖」とインド生命樹更紗の意匠における構成要素－幹・花・大地・空間性

2-1　幹の表現形態－うねる樹

杉浦が導きだしたアジアの生命樹の 4 つの樹相（大地から真っ直ぐに伸びる「直立する樹」・左右にくねくねと伸びる幹をもつ「うねる樹」・うねる幹および渦状の枝先をもつ「渦巻く樹」・2 本の幹がツイスト状にな

っている「絡み合う樹」）を参照すると「桜樹詠文字模様小袖」に描かれた立木の形状は「うねる樹」のカテゴリーにはいる。

「うねる樹」の樹相は、18世紀ヨーロッパ向けインド生命樹更紗にも多用されている。V&A カタログ Chintz INDIAN TEXTILES FOR THE WEST では、18世紀のインド生命樹更紗35点を紹介しているが、そのうち 27 点は「うねる樹」の樹相である。そのうちの5点は「黄地桜樹に文字模様小袖」の以下の3点において立木模様との類似性がみとめられる。

(1) 度程の角度をもって緩やかにＳ字を描く「うねる樹」のライン

(2) 枝先が先端に向けて 60 度程から次第に 120 度程へと湾曲し枝先に花をつける表現形態

(3) 幹の太さと花の直径のバランス（花が大きい）

残りの 26 点に関しても(2)と(3)は該当する。

一枚の布と衣服の違いで変わる幹の表現形態

インド生命樹更紗は一枚の布であるのに対し「黄地桜樹に文字模様小袖」は衣服である。平面構成に特化した一枚の布と衣服の機能を持つ小袖とでは立木の表現形態も異なる。インド生命樹更紗は、寝具や衣装などを除き儀式用または装飾用壁掛けの用途を持ち、生命樹を一枚の絵のように真正面から鑑賞するつくりになっている。生命樹は画面中央に配置され、生命樹をめぐるひとつの物語（大地と生命樹のつながり、樹下の生命体の存在とその解釈）を図解的に表現している。

一方、「黄地桜樹に文字模様小袖」の場合は、着用することによって意匠が成立している。具体的にいえば、小袖の前後見頃に合計3本の立木模様が描かれている。これらの樹は、着用した際に着用者の身体によって支えられ1本の立木となり空間に出現する。つまり、インド生命樹更紗のように生命樹のあり方を「図解を見て理解する」というよりは、むしろ「着用することによって樹を体感する」ようにデザインされている。

2-2　花の表現形態

一本の樹に何種類もの花をつける表現形態はヨーロッパ向けインド生命樹の主要素である。前述のインド生命樹更紗 27 点の樹をみると全てこれにあてはまる。例えば、V&A IM.49-1919 の樹には計 64 個 29 種の花実がなっている。花の断面をデザイン化したパルメットと呼ばれる大輪の花や小花、イチジクなど全く異なる品種のものが混在している。一方、「黄地桜樹に文字模様小袖」は、見頃 54 点・後ろ見頃 52 点、合計 106 点が写真 1・2 から確認できる。5 種類；(1) 5 枚花びら赤花、(2) 5 枚花びら桜色花 (3)10 枚花びら白花、(4) 5 枚花びら糊置き白仕上げ花、(5) 蕾をつけた小花を側面から描いたものからなる。これらの桜の型をベースに色挿し、暈し、刺繍を用いて花弁にバリエーションを持たせて単調さをなくし、あたかも異質の花々で構成されているかのように仕上げている。

2-3　大地の表現形態　命の源泉―樹と大地の繋がり

幹と花には、いくつかの特筆すべき類似点があるが、大地の表現形態は大きく異なる。まず、インド生命樹更紗では「大地」が象徴的に描かれる。大きく分類すると(1)重層する小さな鱗状の断片から成る聖なる「山」、(2)生命の源である水を蓄える「壺」の 2 種類の表現形態がある。V&A 所蔵 27 点のうち 13 点は、「山」もしくは「壺」部分が樹の高さの 20－25％程もの高さを有し、緻密な装飾が施されている。そして、樹下には、左右対称の小さな樹や動物が配されている。山、壺、樹下の生命体を綿密に描ききることで「肥沃な大地」を示唆している。大地に根ざす樹、その樹から栄養を得て生い茂る花実という風にエネルギーの循環を想起させ「命の源泉」というものを表現している。

気候環境に影響される大地の表現形態

大地の表現形態は、インドと日本の気候の違いとも密接に関係している。日本のような雨の多い気候とは異なり、乾燥地帯のインドにとって水は貴重な資源であり、水に対する姿勢が日本とは全く異なる。インド

生命樹更紗に描かれる「大地」や「壺」は生命の源である水をふんだんに含む生命の源として生命樹には欠かせない要素として特に念入りに描かれる。

「黄地桜樹に文字模様小袖」における大地

一方、「黄地桜樹に文字模様小袖」には、あえて大地を描かず小袖の裾を「大地」に見立てている。小袖に描かれた立木は、着用すると一本の樹になり、根の部分がうまい具合に床面にくる。現実世界の大地と一体化させることで樹と大地との結びつきを体感できる意匠になっている。過剰なまでに大地の存在を強調させるインド生命樹更紗とは全く異なる表現方法である。

インド生命樹更紗と「黄地桜樹に文字模様小袖」の空間性

インド生命樹更紗の生命樹の描写には、写実的な立体性と幻想的な文様表現の平面性の両方が混在している。全く違った２つの表現が同じ画面上に並列されている為に、西洋的な写実性が含まれている割には樹としての現実味がなく空間性を感じるには至らない。

一方、「黄地桜樹に文字模様小袖」は、捉え方によっては模様が単調であるとも言えるが一貫して平面的な表現を追求していることで樹としては統一感があり、インド生命樹よりもむしろ現実味があり逆に奥行を感じる。例えば、背面全体の構図をみるとそこに隠された螺旋状の動きー幹を軸に大地から天へと広がる上昇気流ーを見出すことができる。この気流は、冒頭に述べた通り源英明の漢詩が「春の風によって花びらが織をなす」と詠っていることからも分かるように「春の風」を示唆している。写真 1・2 が示すように、赤い花あるいは白い花を下から上へと螺旋状につなげていくと「春の風」を表す円運動の空間曲線が浮かび上がる。この動きは、「黒地梅樹に扇模様帷子」（写真 4）に描かれた扇子が幹の周囲を舞っている様子からもはっきりと確認できることから、同時代に作成された「黄地桜樹に文字模様小袖」にも同様の構図が採用されている可能性は高いといえる。

（写真 4）黒地梅樹に扇模様帷子　江戸時代中期　女子美術大学美術館所蔵。出典：大森達次編集、『KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界』、展覧会図録、女子美術大学美術館、2006、p.63

まとめ

「黄地桜樹に文字模様小袖」では、(1)小袖を着用することで一本の樹が空間に出現する、(2)立木模様の大地部分を小袖の裾にレイアウトすることによって現実世界の大地と一体化させる、(3)「春の風」である渦巻状の動きを示唆する…というように間接的な表現が多用されている。つまり、インド生命樹更紗は、生命樹の概念を一枚の絵に集結させ「視覚的に伝える」役割を担っている。一方、「黄地桜樹に文字模様小袖」では、着るという動作が介入することで意匠が成立、さらに、使い手側がその意匠に込められた想いを読み解くことによって初めて立木模様が完成するのである。

今後、これらの比較分析をもとに、「江戸小袖にみられる立木文様とインド、インドネシア更紗の相関性についての研究」(佐久間代表　科研　デザイン学　基盤研究(C)　2012－2015）を行い立木模様のアジアの交流史を体系化させたい。

参考文献

１）大森達次編集、『KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界』、展覧会図録、デザイン：馬面俊之、制作：アイメックス・ファインアート、発行：女子美術大学美術館、2006

２）杉浦康平、『生命の樹・花宇宙』万物照応劇場、NHK 出版、2000、pp.78-81

３）Rosemary Crill, “Chintz INDIAN TEXTILES FOR THE WEST”, V&A, 2009

４）佐久間華、松本美保子、『江戸時代における小袖の立木模様の造形原理を解明する試み　小袖「桜樹に文字文様」における立木模様の分析』、芸術工学会誌、口頭発表要旨、57 号、pp.64-65、2011